

mediopos 20

2016.3.6 ~ 2016.3.30

【神秘学ポエジー～風遊戯 第45集】

media--poesie ヴァージョン

mediopos476-500

神秘学遊戯団



■立花隆『武満徹・音楽創造への旅』(文藝春秋 2016.2)

(武満徹)「ほんとうの音というものは、たくさん私たちのまわりにある音、生きている音、いっぱいある音だと思っています。それ自身の生命をもっている音があるわけです。作曲家は創って人に聞かせる側かもしれませんが、私個人として言えば、まずそれを無心に自分から聞く。もうなんの意味ももたせずに、ただそれを聞く。そこから音楽というものを始めたいと思うのです。ですから、どんなノイズも、車の音も、私たちがしゃべっている声も、われわれには同じ価値をもっている。それぞれに美しさがあります。(中略) いわゆる調律された音だけではない音たち、それから、音のもっと内部の音、そういうものに作曲家は感心があります。つまり、音楽の最初に帰ろうとしているわけです」

「日本の音楽というのは、すべて人生と音楽、そして宗教的なもの、哲学的なもの、そういうものが絶えず背景にあるのですね。それで一つの芸というものは個人のなかで磨かれていく。なにか大きくいろいろの形に展開していくというよりも、求心的にどんどん掘り下げられて、一つの点に到達する。一方、たくさん人間がいっしょに一つの曲を演奏する、個人的なものでなく、一つの社会的な集団の音楽として味わう。ヨーロッパの音楽などはそういうものだと言えませんが、その当否はともかくとして、この二つの違いですね。(中略) 私たちの立場としては――私たちは非情に宙ぶらりんな立場にいるんです」

「バッハの音楽は薩摩琵琶の日本の音楽の伝統とはなにか違う根っ子をもっていると思うのです。それでいてあるところでは、最後には一つになるだろうと思うのですけれど。そいつをどうやって一つにするかということが悩みというか、そいつが仕事になるわけです」

バッハと武満のあいだで
わたしの耳はゆれている
ほんとうの音をもとめて
わたしの心はゆれている
うつくしい音をもとめて
わたしの魂はゆれている

あらゆるものを響かせて
あらゆるものが奏でられ
あらゆるものが点となり
わたしのなかで点となり
あらゆるものが天となり
わたしのなかで天となる

ほんとうの音がききたい
ほんとうの心をゆらせて
ほんとうの魂をゆらせて
わたしの耳はゆれている



■和辻哲郎「面とペルソナ」(岩波書店 1963.3) (『和辻哲郎全集第十七巻』所収)

「芸術家は「人」を表現するのに「顔」だけに切り詰めることができる。我々は四肢胴体が欠けているなどということに全然感じないで、そこにその人全体を見るのである。しかるに顔を切り離れたトルソーになると、我々はその美しい自然の表現を見いだすのであって、決して「人」の表現を見はしない。もっとも芸術家が初めからこのようなトルソーとして肉体を取り扱うということは、肉体において自然を見る近代の立場であって、もともと「人」の表現をねらっているのではない。それでは、「人」を表現して、しかも破損によってトルソーとなったものはどうであろうか。そこには明白に首や手足が欠けているのである。すなわちそれは「断片」となっているのである。そうしてみると、胴体から切り離れた首はそれ自身「人」の表現として立ち得るにかかわらず、首から離れた胴体は断片に化するということになる。顔が人の存在にとっていかに中心的地位を持つかはここに露骨に示されている。

この点をさらに一層突き詰めたのが「面」である。それは首から頭や耳を取り去ってただ顔面だけを残している。どうしてそういうものが作り出されたのか。舞台の上で一定の人物を表現するためにである。最初は宗教的な儀式としての所作事にとって必要であった。その所作事が劇に転化するに従って登場する人物は複雑となり面もまた分化する。かかる面を最初に芸術的に仕上げたのがギリシア人であるが、しかしその面の伝統を持続し、それに優れた発展を与えたものは、ほかならぬ日本人なのである。』
「人間生活におけるそれぞれの役割がペルソナである。我れ、汝、彼というのも第一、第二、第三のペルソナであり、地位、身分、資格等もそれぞれ社会におけるペルソナである。そこでこの用法が神にまで押しひろめられて、父と子と聖霊が神の三つのペルソナだと言われる。しかるに人は社会においておのおの彼自身の役割を持っている。己れ自身のペルソナにおいて行動するのは彼は己れのなすべきことをするのである。そうなるとペルソナは行為の主体、権利の主体として、「人格」の意味にならざるを得ない。かくして「面」が「人格」となったのである。」

* 「裏をみせ表をみせて散るもみじ」(良寛)

ひとのおもては
ふしぎよな
おもてとなって
生まれきて
うらをかくして
生きつつも
おもてありせば
うらありて
おもてみせつつ
うらをみせ
やがて散りゆく
ひとならば
生まれ死に
生まれ死に
生のはてはいづくにありや
死のはてはいづくにありや
ひとのおもては
ふしぎよな



ひとつの言葉に
どれほどの力を注げば
呼吸をするように
言葉を使うことができるだろう

沈黙を得るためには
どれほどの言葉が
その栄養となり根を茎をのばし
花にならなければならないだろう

■新倉典生『正楽三代』(dZERO/インプレス 2015.4)

「そうですな、やり始めて、三十五年くらいは、右手親指の付け根とくすり指の第二関節のところに、すごく大きなハサミダコが盛り上がっていましたが、三十五年をすぎると、いつの間にか、そのタコがなくなり、四十五年間のいまはその跡もないくらい、すっかり消えてしまいましたね。これはハサミを使うのに、力がいらなくなったからじゃないかと思えますよ。つまり、どんなものでも呼吸で切れるようになって、力を入れる必要がない。だから、切るのは、楽なもんです。正真正銘の楽、つまり『正楽』ってわけで。(日本経済新聞文化部『日本人の手』展望社)

正楽の紙切り芸は、名人の域に達していった。

「ガキの頃に」寄席の客席かた注文して切ってもらったという、五代目立川談志師匠は自著『立川談志遺言大膳14』（講談社）でこう記している。

紙切りの初代「林家正楽」。これはトップクラス。名人。(中略)

我が家に正楽作品が四枚ほどある。ガキの頃に客席から注文して切ってもらった「宝船と七福神」「土俵入り」「柳にお化け」など。その切り口の線はダ・ビンチと似てるのだ。で手塚治虫とも似てる。「レオナルド・ダ・ビンチと手塚先生が世界の二大天才である」とは家元の言葉。そしてその描き上がった線が似ているのである。」



■安西徹雄『彼方からの声／演劇・祭祀・宇宙』（筑摩書房 2004.1）

「結局のところ演劇は、見えざるもの見える現実世界への顕現であると規定せざるをえないと思う。つまり、ある種の非現実、見えざる異次元の世界が、俳優の身体を通じて舞台の上に顕在化され、現実の時間と空間のただなかに侵入し、占有するプロセス—それが、演劇という出来事の本質であると考えざるをえない。」

「俳優は一種の依代であるという観念を媒介項として、(・・・) さらに展開させてみると、見えざる非現実の見える現実世界への侵入、受肉という演劇上演のプロセスは、構造的に、聖なるものの現実世界への出現、開示 (hierophanie) としての宗教祭祀と、まさしく相同の関係にあることが見えてくるのではあるまいか。」

「エリアーデに従って、われわれは宗教的祭祀を、宇宙創成 (コスモゴニー) の反復であると理解した。しかし、宇宙の創成そのもののまた、実は、「聖なるもの」が原初のカオスに現前し、侵入し、占有して、目に見えるコスモスを創成することにほかならないのではないか。つまり、宇宙創成自体がすでに、「見えざるもの」の現実の世界への侵入、占有という構造を持っているのではないか。とすれば、もっとも外周にあるのは、祭祀そのものではなく、むしろ、宇宙創成なのではないか。「見えざるもの」の開示 (ヒエロファニー) としての祭祀自体も実は、原初のコスモゴニーの演劇的反復、模倣にほかならないのではないか。」

「世界を劇場として神々の演じた宇宙創成を再現するものが祭祀であり、それに内接する同心円として、その本質的な構造を反映、反復するものが演劇の上演であり、さらにその内側の第三の入れ子として戯曲に反復、模倣され、さらにそれを自覚的に集約したモデルとして、劇中劇、あるいは変装など、個々の演劇的技法を位置づけることができる。」

見えるものの奥には
見えないものがある
見えるものは
ほんとうは見えないのだ

私たちは見えないものを
見える姿になって演じようとする
けれど私たちもまた
ほんとうは見えないのだ

世界は見えないものが
見える姿をとった戯れなのだ
その戯れのなかにいる私たちも
やがては見えない世界へと帰還してゆく

mediopos-480

2016.3.10



■山田航編著『桜前線開架宣言／Born after 1970 現代短歌日本代表』（左右社 2015.12）

「文学なんて自分には縁遠いものと思っていた。というか今も縁遠いと思う。でも短歌のリズムにはすっかりハマってしまったのだ。二十一歳くらいのときだった。教科書で読んで印象に残っていた寺山修司の歌集を手にとってみたことが全てのはじまりだった。なんだこれは。読んでいたら音楽が浮かんでくる。メロディに歌詞を乗せてゆくのと同じ感覚で読めるのだから、最高に楽しかった。自分の作ったメロディに複数のパターンの歌詞をはめてゆくとか、すでに歌詞のついた曲に全く違う歌詞を乗せてゆくとか、昔よくしていた。それと同じ感覚だった。」

「しかしぼくは大きな勘違いを一つしていた。寺山修司から短歌に入ったぼくは、歌集というものをヤングアダルト、つまり若者向けの書籍だと思い込んでいたのだ。短歌が世間では高齢者の趣味だと思われていたなんてかけらも知らなかったし、実状をそれなりに知った今でも心のどこかで信じられない。どうせなら、ぼくと同じ勘違いを、これから短歌を読もうとする人みんなすればいいと思う。みんなですれば、もう勘違いじゃなくて事実だ。」

ぼくは短歌のおかげで大人にならなくて済んだから、今はとても楽しいです。」

桜咲き桜散り
桜の下には
短歌が埋まっている

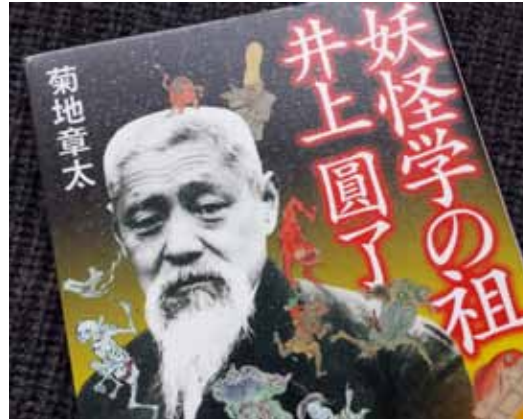
短歌は
ニガイか
ショッパイか

短歌は
オトナか
ワカモノか

短歌は
歌えば
それでいい

短歌の下には
なにが埋まってる
心の鏡が埋まってる

言葉のなかに
映り込む
心の顔が歌ってる



■菊地章太『妖怪学の祖 井上圓了』（角川選書 518 平成二十五年一月）

「圓了の辞世の史には「非僧非俗」の文字と、さらには「無位無冠」の文字までつらなつて出てくる。（・・・）僧にあらず俗にあらずがゆえに、心はつねに穏やかだという。地位もなく官にも属さぬがゆえに、身はおのづから自由でいられるという。わだかまりなどないかのごとくに言つてのける、その境地に至らしめたものは何だったのか。

非僧非俗、無位無冠は、しかし圓了の矜持でもある。

圓了は十四歳で得度して僧侶になっている。しかし大学卒業後に僧籍を返上した。まさに僧にあらず俗にあらずである。一生官界に身を置かなかつたのだから、無位無冠である。

だがそれだからこそ、誰にも束縛されることなく真理を愛し国を愛する思いをいだきつづけることができるのだ。」

「かつて原因がわからずに妖怪のせいとされた自然現象がたくさんあつた。それを明らかにするために古い資料をあさり実地の聞き取りを重ねる。そうして得られた情報をもとに観察や実験をくりかえしてその正体を解明する。まさしく科学者の姿勢にほかならない。それをとんでもなく豪快なスケールでこころみたまへ人なのである。

哲学者・妖怪学者・宗教改革者だけではなかつた。変人科学者でもあつたのだ。ただ、こうしたあまりにも多面的な活動が圓了をとらえにくくもしている。

圓了の時代は近代的な学問の黎明期だつた。さまざまな知を横断することができた時代だつた。そもそも学問の「横断」という言い方からして今日的な発想であろう。やがて学問が細分化され、横断など到底不可能になつた。それを実現した人はもはや過去の人になつた。圓了の妖怪学は人文科学はもちろんのこと、社会科学や自然科学まで射程に入れている。かつてそれは可能であつた。しかし今やそんなことを実現できる人間などいなくなつた。その必要もなくなつたのである。

しかし、あまりにもこまぎれになつてしまつた今の時代、また新たに知を総合しなおすことが抜き差しならないほど要請されてきた。ひとりの人間を形成していくには、バランスのある知の総合が必要だと痛感されるようになった。それが不可解な迷信や不合理な権威にまどわされないことにつながっていく。それは百年たつた今も変わっていない。いや、今こそもっと必要とされているのではないか。

圓了が埋もれてしまつたのは時代の必然だつた。そして今よみがえつてきたのも時代の必然かもしれない。」

何かであるということは
何かであるために
何かでないものが
かくされているということだ

みずからを名乗るとき
その名であるために
その名ではないものが
そこには隠されている

表であるときには裏が見えず
光あるときには闇が見えず
男であるときには女は見えず
有であるときには無は見えず

だからお化けがでるのだ
隠されたものたちが
姿をとって現れてくるのだ
こんな顔かいと虚ろを見せて

何かであろうとするならば
何かでないものでもあることだ
みずからのなかの妖怪とともに
何もつてもない者として



■小松和彦『妖怪学新考』（講談社学術文庫 2015.7）

「新しい妖怪学は、人間が想像（創造）した妖怪、つまり文化現象としての妖怪を研究する学問である。妖怪存在は、動物や植物、鉱物のように、人間との関係を考えずにその形や属性を観察することができるものではなく、つねに人間との関係のなかで、人間との想像世界のなかで、生きているものである。したがって、妖怪を研究するということは、妖怪を生み出した人間を研究することにほかならない。要するに、妖怪学は「妖怪文化学」であり、妖怪を通じて人間の理解を深める「人間学」なのである。」

「ある意味で、人々の心のなかの「闇」が広がりがつつあるのだ。いいかえれば「妖怪・不思議」は、科学主義・合理主義が生み出した便利さや物質的豊かさを享受しつつ、その世界を支配している価値観に疑問をもったり、それにしがって生きることに疲れた人々の前に立ち現れてくる。「妖怪・不思議」は現代社会を支配している価値観、つまり人々の生きている「現実」世界をこえたものである。人々はそうした「妖怪・不思議」を、フィクションを通じてあれ、うわさ話としてあれ、自分たちの世界に導き入れることで、自分たちの「現実」にゆさぶりをかけたり、そこからの離脱を試みているのである。」

「妖怪・不思議」は、自分たちの「現実」を相対化し、別の「現実」もありうることを示唆する。（・・・）「妖怪・不思議」は、私たちに「もう一つの現実」の世界を用意し、そこで遊ぶことを、そして、それが人間にとってどれほど大切なことかを教えてくれるのである。」

妖怪学は人間学である
心のなかに妖怪はいる

言語学は人間学である
人は言葉の家に住む

経済学は人間学である
人はお金で変わるのか

美学は人間学である
人は美を求めてやまない

数学は人間学である
人はアイデアを生きている

物理学は人間学である
人は宇宙を生きている

科学は人間学である
人は科学で人を捨ててはならない



■岡潔（森田真生編）『数学する人生』（新潮社 2016.2）

（森田真生）「人は本来、ただそこにいるだけで懐かしいのだと岡は言う。「懐かしい」というのは、必ずしも過去や記憶のことではない。周囲と心を通わせ合って、自分が確かに世界に属していると実感するとき、人は「懐かしい」と感じるのである。だから、自他が分離する前の赤ん坊にとっては、外界のすべてが懐かしい。その懐かしいということが嬉しい。

「生きているという経験の通奏低音は「懐かしさと喜び」なのだ。これが、岡の根本的な信念である。」
『毎日新聞の連載をまとめた最初の著書『春宵十話』のはしがきは「人の中心は情緒である」という宣言に始まる。ところが、肝心の「情緒」が何かというと、いまひとつはっきりしない。岡はこの言葉を繰り返し用いながらも、それを明瞭に「定義」することを避けるのだ。

そもそも、岡の思想は閉じた体系をつくることを目指していない。たとえ未定義のままでも、実感に裏打ちされた言葉を繰り返し用いていく。そうしながら、その実感の内容を確かめていくようにして彼の思考は進む。だから読者は、試行錯誤する岡とともに考えることを要求される。そこに岡のテキストの醍醐味がある。」

決められたものは
そのいのちを失うだろう

いつもはじめてのとき
ひとは育つことができる

懐かしさは抱かれている安らぎ
世界のなかで生きているという喜び

数は生きている
数はいつもはじめて
数は懐かしい

数の奥には
世界の秘密が生きているから



■山口謙司『日本語を作った男／上田万年とその時代』（集英社インターナショナル 2016.2）

「我々が使う現代日本語は、明治時代も後半、およそ一九〇〇年頃に作られた、いわゆる原文一致運動の産物である。自然に変化してこうなったものではなく、「作られた」日本語である。

日本語を使う全員的一致で作られたものではないにせよ、これが「標準」とされた「標準語」であり、それは官報で公表され、教科書で使われて、普及することになった。

しかし、それからおよそ百年、すでに一九〇〇年頃の日本語と我々が使う日本語とを比べてみると大きく変化してしまっている。

ところで、一九〇〇年頃に作られた言文一致体のコトバを、そこから一千年遡ると、平安時代の前期、日本語を<ひらがな>と<カタカナ>と漢字を使って書きはじめた時代、つまり日本語の黎明期が見えてくる。

言語がおおよそ百年でひとつの大きな変化を見せるということから考えれば、それが十回連なって、日本語は大きな調性を行わなければならない時期に差しかかっていたのではないと思われる。

それが、明治維新という大きな波とともに訪れたのである。

明治維新、そして言文一致の波から百年を経て、我々はようやくその改革を客観的に見る時期にきたのではないと思う。

言文一致はたったひとりではできないものではなかった。そして、政府や文部省などが押しつけてやっても、それだけでどうにかなるものでもなかった。

政府や文部省のなかにも、今のままでいいという人もいたし、日本語を捨てて英語にしまえという人もいたのである。

こうしたなかで、東京帝国大学文化大学という最高学府の、そのなかでも博言学という言葉の専門家、ドイツ、フランスの留学を終えて最先端の学識を誇る男は傍観者であることを許されなかった。

本書の主人公となる上田万年である。

研究、教育、政治という与えられた三つの術を使って、万年は、言文一致を行おうとして旗を振った。」

作られなければ
標準は存在できないけれど
作られたものは
育っていかなければ
標準は死んだものとなる

標準でないものが排除されるとき
標準もまたかぎりなく貧しくなる
標準でないものによって
標準もまた変わり育ってゆき
標準の波は寄せては返しながら
またあらたな標準が現れ育ち消えてゆく

標準を守るのはだれだろう
標準を変えるのはだれだろう
変化という現象のなかで
標準は因果交流電灯を明滅させている



■田口洋美『越後三面山山人記』（ヤマケイ文庫 2016.3）

「人が去ったあとの風景は寂しい。

三面が閉村し、村人が移転してしまうと、かつての耕地はカヤとイバラの繁りになり、雑木も伸び放題になった。村人が自分たちの暮らしの場として、汗を流して守り続けてきた土地は、野生に返り、植物が繁茂し、動物たちが闊歩する土地となった。この土地に人が入ってくる前の姿に戻ろうとしているかのようだ。いずれダムが完成すれば、すべて水底に没してしまうのだが、とりあえず、今は、野生が生き返りつつある。

かつて、私は善栄爺ちゃんに尋ねたことがあった。それは、山が人と、あるいは自然と上手く付き合っていくにはどうしたらいいのだろう、三面の人々は山を維持するためにどういう工夫をしてきたのだろう、という素朴な問いであった。善栄爺ちゃんはいった。

「人間が山で生きていくには、山を半分殺してちょうどいい具合になるんだぜ。

オレたちは、自然に負けたら生きていくことならねえんが。自然の力を利用していかんばねえんだぜ。もっともあんたのような都会で暮らしてる者には、`山を半分殺す、なんていったってわかんねえと思うどもな。山も人間もお互い欲を半分殺して、ちょうどいいっていうことだぜ。自然の力を利用するなんていったって、そうそう間屋がおろさねえごて。そこにはさまざまなことが出てくるぜ。そこ考えねえとこの意味は飲み込めねえごて」

樹は亭々と聳え
鳥は高く飛び
獣は山を駆け
人は自然を歩く

自然のなくなってしまった風景で
人は生きていくことはできないけれど
人のいなくなってしまった風景に
自然もまた生きてはゆけない

ロゴスは身体に宿り
魂は大地に抱かれ
天空と呼応し
人は天地を生きる

身体を汚れとしか思えない人は
この大地に生きてるとはいえないけれど
精神のなくなってしまった人も
もはや人間であるとはいえない



■ジャスムヒーン『神々の食べ物／聖なる栄養とは何か』（ナチュラルスピリット 2007.5）

「対象を特定できるできないにかかわらず、誰もが何かに飢えています。そして人間の飢えのほとんどは、簡単に識別できます。多くの人々が愛に飢え、またある人は富に飢えています。健康と幸福への飢えもまた、私たちの時間を支配します。今このときにも、ある人々は報復を求め、ある人々は調和や平和を求めて叫び、正義と真実と優しさが打ち勝って愛する者を戦場に送らずにすむことを求めています。

ある人々は肉欲を満たすことに飢え、またある人々は霊的に満たされることに飢えて、まるで日々の食事をとるように悟りを求めます。そのような人々は、より説明しがたい飢えに動かされてからです。飢えは、その深さと駆り立てる欲求によって様々な方法で表現されます。人生における問題が何であろうと、その問題の表面を一度むけば、誰もが何かに飢えていることがわかります。

権力への飢えはほかの征服につながり、知識への飢えは成長へとつながります。富への飢えはほかからの搾取、利他主義への飢えは富の再分配につながります。コミュニケーションへの飢えはほかとの和合へとつながり、本当の食べ物への飢えは、私たちにしばしば欠乏感を与えます。知恵に対する飢えは、私たちが自分自身の深みに触れさせ、その知恵を人生に应用するように私たちを試します。真実への飢えは、私たちをスピリットという霊薬の入った内なる聖杯の発見へと導きます。

スピリットへの飢えはDOW (Diveine One Within) を明らかにします。」

「私たちは愛、健康、豊かさなどに対する飢えを満たすことができても、DOWを知るという生来の飢えを満たすまでは決して満足することはありません。すべての存在は、DOWを知るようにプログラムされています。DOWは私たちの身体の聡明な創造者、神と呼ばれる力であり、私たちがそのことを思い出してDOWと意識的に溶け込まない限り、私たちが完全に満たされることはないのです。賢人たちはこのような栄養の摂り方を神々の本当の食べ物へのアクセスと呼びます。」

ほんとうの食べ物はどこにあるのですか
どんなに食べても満たされはしないのです

ほんとうの言葉はどこにあるのですか
どんなに話せても満たされはしないのです

ほんとうの力はどこにあるのですか
どんなに力があっても満たされはしないのです

ほんとうの愛はどこにあるのですか
どんなに愛されても満たされはしないのです

ほんとうの知恵はどこにあるのですか
どんなに知っても満たされはしないのです



■谷口吉郎『雪あかり日記/せせらぎ日記』（中公文庫 2015.12）

（昭和一四年九月四日）「私がドイツに滞在した約一年間は、歴史が暗転していく激流のさ中だったと言えよう。その点で、私には得がたい体験であったと言えるが、いろいろと深刻なショックを受けたことは確かだった。

まず、神戸を出港して約一ヶ月、はるばるベルリンに到着すると、その第一夜に暴動が起こっている。ナチス党員がユダヤ人の経営する商店を襲撃し、教会堂も焼けているのに驚いた。そのベルリンに住んでみると、ユダヤ人に対する政策が想像以上にすさまじいのを知り、ますます驚愕を深めた。

映画館や劇場の入口には、ユダヤ人の入場を禁止する制札が掲示されている。公園には、ユダヤ人専用のベンチが黄色いペンキで塗られていて、一般市民の腰かけるベンチとはっきり区別されている。祝祭日にはユダヤ人の家は国旗を掲げることは赦されない。そんな指令に叛く者は「強制収容所」へ拉致され、すぐれた芸術家や学者は国外へ追放され、姿を消してゆく。

そんなベルリンで私は冬を過ごしたのであった。毎日、暗い天候が頭を押しつけ、気分を重くしめつける。それは想像以上のもので、日本の北陸地方で育った私にさえ、ドイツの冬の心理的重圧は、骨身にこたえた。その憂鬱さから逃れるために、私はできるだけ美術館を訪れ、オペラ劇場へ出かけた。絵や彫刻に接し、音楽と舞台に包まれていることが心の救いとなり、寒い冬、ローソクの火が光る古い教会堂の中でミサの曲にも耳を傾けた。

しかし、それによってドイツの冬がドイツ人の美意識に強い影響を与えていることを実感することができたのは、得がたい体験であった。それが日本の建築家である私の意匠心に、風土と造形という問題についていろいろな示唆を与えた。そう考えると、緊迫したベルリンの世相の中で暗い冬を過ごしたことが、私にとって有意義な体験であったと、今、つくづく思う。」

人は流される
人に流され
世の中に流され
国家に流され
メディアに流され
時代に流される

流されないことはむずかしい
流れのなかにありながら
流れにとらわれないために
いったいなにができるのだろう

人は自らが流されていることに
気づかないでいる
とらわれないためには
流されていることに気づくことだ
注意深くあることだ
みずからが流れのなかで
みずからを消してしまわないように



■イーライ・パリサー『フィルター・バブル』（ハヤカワノンフィクション文庫 2016.3）

「我々がどういうものを食べているのかは、その食品の生産方法に左右される。同じように、我々が消費する情報はメディアに左右される。そしていま、我々の情報は自分に関係のあるものだけが満載された状態になろうとしている。それはそれでいい面もあるが、過ぎたるは及ばざるがごとしである。パーソナライゼーションのフィルターは目に見えない自動プロパガンダ装置のようなものだ。これを放任すると、我々は自らの考えで自分を洗脳し、なじみのあるものばかりを欲しがるようになる。暗い未知の領域にひそむ危険なことなど忘れてしまう。

フィルターバブル内では、新たな洞察や学びに遭遇するチャンスが少ない。異なる分野や文化の発想がぶつかることから新しいものが生まれるというのに。」

「友達と見比べないかぎり、自分が見ているグーグルやヤフーニュースがほかの人のものとどう違うのかなどわかるはずがない。しかし、なにが重要なのか、なにが真実なのか、なにが現実なのかという認知さえゆがめられることを考えると、なんとしても、フィルターバブルの姿を白日の下にさらす必要がある。」

鏡よ鏡よ鏡さん
私の見たいものを
映しておくれ
いやなものなど
見せないでおくれ

人は自分を鏡に映して
それを見ようとしている
インターネットはその忠実な鏡だ

鏡の世界から抜け出すために
人は生まれてきたのかもしれない
鏡は他者を映し出してくれるから
そしてそれが自分を育ててくれる

インターネットは
すぐれた反面教師かもしれない
なにを見るかでその質も変わる
こんな顔かい
そう振り向いた自分の顔に
知らない自分が映っていますように



■『南方熊楠の図譜』（青弓社 1991.12）

「南方熊楠を、性急に「思想」と見るより、彼が住んでいた環境生態系の「いきもの」として、あるがままに、私達の手によって、再現してみる事こそ望ましいと思われる。彼の学問の基礎に、生物学があった、ということ以上に、彼の生き様それ自体が、生物学的であったからにほかならない。

私達は、彼を生きたまま観察し、それぞれが、手描きの図譜をつくり、その新種の特長を記した。仮りの命名を、MI NAKATELLA・NEOSAPIENS、としてもよいであろう。」

「南方熊楠を論じることは、ありとあらゆる、世界と世間に通じる回路であり、パッサージュ（路地裏）でもある。一つの回路をとおて、その通路を歩きながら、世界の歴史と民俗の大道に通じてゆく。人間が、かつて、そして現在もなお、息づく聖堂と僧伽に通じる入口に立つ事もできる。ヒマラヤの山麓の瞑想道場に参入することもできる。まぼろしのなかに、エジプトのアレクサンドリア代図書館にも出入りできる。イギリスの大英図書館には、特別秘蔵室にも、入ることさえ自由である。「学問の自由」を、南方熊楠ほど、自前のものとしていた人物は少ない。カレード・スコープのような顕微鏡が一台あれば、至福を感じる少年性と宇宙性が、彼のなかには息づいている。大不思議世界の「妙なもの」の探究に、全身全霊をつぎこんだ、まことに希有なる夢現の一生涯であったといえる。」

クマクス
クスクス
笑っているか
不思議世界を
遊んでいるか

クマクス
マスマス
自由でいるか
生きたガクモン
求めているか

クマクス
スクスク
育っているか
夢の種族は
元気であるか



■池上彰・佐藤優『新・戦争論／僕らのインテリジェンスの磨き方』（文藝春秋 2014.11）

（池上彰）「カンボジアは、かつてポル・ポト政権時代、一〇〇万人とも三〇〇万人とも言われる多数の国民が虐殺されました。カンボジアの人たちは穏やかで、その表情は「クメールの微笑」と呼ばれたほどでしたが、一瞬にして国土は「キリングフィールド」（殺戮の地）になったのです。

いまでも各地で処刑され埋められた人たちの遺骨が出てきます。人は、なぜ人を殺すのか。それとも、敵国の人間ではなく同朋を。

この問いに、安易な答えはありません。しかし、世界は一瞬にして平和な地から修羅場になってしまうのだ、ということ、私達は警戒しておく必要があります。それは、旧ユーゴ内戦でもイラクの内戦でも、仲の良かった隣人たちが殺し合うようになった歴史が示しています。」

蝶がひらひらとぶだけで
やがてはそれが竜巻になるように
心のなかに生まれた小さな違いが
やがて竜巻にさえなってゆく

小さな小さな雪玉が
くるくると転がってゆき
やがては大きな雪崩となって
すべてを飲み込んでゆくように

心には注意ぶかくあることだ
近いところにある小さな違いこそが
妬みや嫉みの種となり
それがやがて暴風雨のようになる
似ているからこそ
違いが致命的な誘因になってしまうのだ

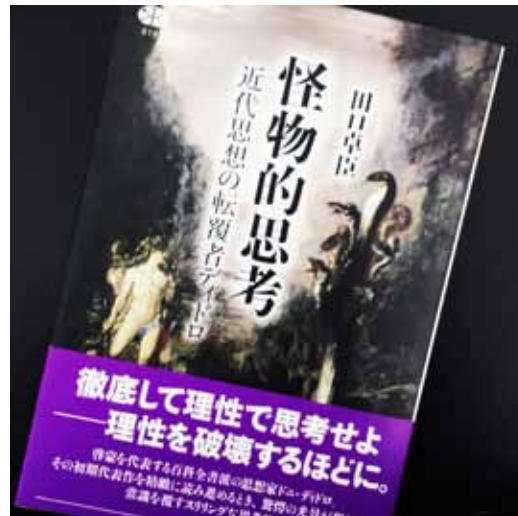
mediopos-491

2016.3.21

■田口卓臣『怪物的思考／近代思想の転覆者ディドロ』（講談社選書メチエ 2016.3）

「いかなる予定調和的な目的からも脱線し、みずからの内なる偏愛に基づいて自己増殖を続けるディドロの「怪物的思考」。――それは超越的な高みから目的論的な物語を語ってよしとする「啓蒙」とは異なり、数多くの「他者の言葉」に寄生し、そこから次々に予測不能な発見を招きよせようとするものだった。ところがこのようなディドロの思考は、本性的に目的論的であるほかない「思想史」の物語に回収され、いつの間にか「啓蒙」という名前のもとに一括されることになった。当初の意図を超えて別の意味を生みだすのは言葉の常だとしても、これはあまりに皮肉な歴史の逆説だった。

だから今日、思想史の森のなかからディドロの言葉の炸裂音を聴きとることは、「啓蒙」に絡めとられた無数の「怪物的思考」の断片を、近代科学の実証主義によって抑圧された「想像力」の飛翔を、もう一度私たちのもとに取りもどすことを意味しているのである。



啓蒙とは
わからないものを
見ないですますことだ

啓蒙とは
光だけを見て
闇を見ないということだ

啓蒙とは
結論だけに向かって
決められた道を歩くことだ

啓蒙とは
教える者と教えられる者を
分けてしまうということだ

啓蒙とは
正しいひとつの物語以外に
物語を認めないということだ

啓蒙とは
調和だけを愛し
不調和から学ばないということだ

だから怪物が現れる
あらゆるものが転覆される
あらゆる想像力が飛翔する



思考を殺さずに
情緒を深めることはできないのだろうか

なぜ思考なき身体で
成長することを選ぼうとするのか

生を超えて魂を再生させるために
感情と意志の世界だけで生きようとするのか

死んだ思考でつなぎとめられていた
それまでの世界は失われ
感情と意志の世界だけが残る

霊魂は決して死にはしないけれど
病と死を越えた成長という魂の謎の前で
私たちは深く祈りを捧げずにはいられない

■『認知症／シュタイナーの精神科学にもとづく／アントロポゾフィー医学の治療と介護の現場から』（耕文舎叢書9 2015. 冬）

「認知症のなかでもっとも多いアルツハイマー病の人々は、認知症に見られるその典型的な症状のもとに、もっとも地上的な道具のひとつである思考能力を手放していくことになります。その結果、そこでは世界がばらばらに断片化していきます。それは私たちに大きな不安をもたらします。しかしそこには同時に、その喪失現象に対するひとつの埋め合わせが用意されています。認知症患者は再び新たに――子どもたちに見られるように――無邪気に、情緒的・直感的に、周囲の事物を見るようになるのです。そしてそれは彼らに、芸術的行為をとおして、新たな世界へ新たな歩を踏み入れていく可能性をもたらします。

しかしそこでは彼らは思考し理解することによってではなく、感じるこいよって世界と出会うことになります。そして、彼らのそのような生活が意味あるものになるかどうかは、私たちの人間観に左右されることになるのです。霊魂は物質的な脳組織によって呼び起こされるという主張のもとでは、脳の死とともに《副産物》としての霊魂も必然的に消えてしまうこととなります。したがってそのような見解のもとでは、認知症であることはゆっくり進んでいく霊魂の死を意味することになってしまいます。しかし魂は身体の隅々にまで浸透しているという観点に立つなら、認知症患者と世界の出会いは他の霊的領域のなかで実現されていく、という可能性が残されることになるのです。」

「認知症を抱えることになってしまったとしても、私たちの人間的成長はそこで終わってしまうわけでは決してありません。認知症のせいではことばの世界・思考の世界が失われてしまったとしても、私たちは、だからこそ再び新たに開かれる、かつての豊かな感情と意志の世界の内へく迎え入れられる>ことになるのです。まさに私たちはそこでこそ――あらたな人生へと通ずる死の扉を押す前に――さらに新たに成長していくことができるのです。」



■『村上華岳』（新潮社美術文庫 39 平成九年十二月）

「実は私は絵なんかどうだっていゝ、描けなくてもかまはないと考へます。若し世界の本体を掴むことさへ出来れば、それが一番大切なことです。それがしっかり自分のものとなったなら絵が描けなくても詩が作れなくてもいゝ、その人はそれで生命の目的を果し、生活の意味を実現し、そして大きな宇宙の意思と一つに融合することが出来たのですから。私が仏像を描いてゐるのは、そこへ到達する修行に過ぎません。」（『製作は密室の祈り』大正九年）

「私がこの汚濁なる世の中をなほもて真面目に愛したい。而して浄化を計りたい。是が私の一つの念願でもありませうか、それが自己へ内向しては『人生修行』となり、亦『画作の苦行』ともなります。」（『書簡』昭和四年）

私はなにを見ているのか

月を指しているのに
指しか見ないでいるように
記されている文字を眺めるばかりで
そこに何が書かれてあるかがわからずにいる

私はなにを求めているのか

求めているものは
容易に手段と取り違えられるから
人は人の上に人を造り人の下に人を造り
右の頬を打たれば両の頬を打ち返し
心貧しき者はただの貧しき人になる



好きなようにすると
最初の「好きなように」は
もっと「好きなように」にするために
「好きなように」をどんどん超えようとする
そして上手いと下手はどこにもいなくなる

教えられたようにすると
最初の教えられたようには
もっと教えられたようにするために
教えられたようにのなかで生きようとする
そして上手いと下手だけの世界が広がってゆく

■ coyote No.58 Spring 2016 『安西水丸 おもしろ美術一年生』（スイッチパブリッシング 2016.3）

（安西水丸 記）「絵は上手い下手で決められない」という考えがありまして、日本のもしかしたら世界中そうかもしれませんが）美術教育は上手い下手で決めすぎる。例えば桜を描いた子供に、先生が「桜はそんな色じゃないだろう」と言ったとすると、言われた子供はそれでもう絵を描くのが厭になって、さらにそれがトラウマになって、オーバーに言えばずっとそれを引きずってしまうんですね。そういう人をぼくはたくさん見えています。絵は上手い下手より、その人にしか描けない魅力のある絵があるはずなんです。何だかうまく言えませんが、いわゆる従来の美術教育を屈返すような本を作りたいんです。ただ、あんまり教育的にはしたくない」



わたしはなぜそうするのか

合理的であろうとするとき
合理的の果てにあるものはなんだろう
なぜ合理的であるべきだとするのか

科学的であろうとするとき
科学的の果てにあるものはなんだろう
なぜ科学的であるべきだとするのか

利己的であるとき
利己的の果てにあるものはなんだろう
利己的はほんとうに利己的でありえるのか

賛成の反対のとき
反対の果てにあるものはなんだろう
反対はほんとうに反対でありえるのか

わたしはなぜそうするのか
わたしのなかにはなにがあるのか
問いの果てにあるものを求めねばならない

■中村隆文『不合理性の哲学／利己的なわれわれはなぜ協調できるのか』（みすず書房 2015.12）

「人間性のもとでの各種行動・選択・価値観のなかには、経済合理性の観点からは意味不明なものもあるが、しかし、それでも確固とした「理由」があり、その場合には理性に反する行為ではないし、共感によってある程度社会的にそれらを理解することも可能である。だからこそ、自分の利益を捨てて他人のために尽くしたりする「お人好し」や、最先端の医療設備が揃った病院を抜け出して、丁寧に問診・触診してくれる古いタイプのお医者さんとの繋がりを求める患者もいるし、われわれはその人たちが何をしているのかを理解でき、ときに賛同できるのである。もし本当に個人が「個体そのもの」として、「大きな利益」を求めているだけなのであれば、もらえるものは何でも、そして誰からでももらえばよいはずである。しかし、そのような人物はどう多くはない（かもしれない）。」

「もう一つここで触れておくべきは、そのような市場原理とは異なる原理を含んだ人間性に対し、そこにすぐさまモラルを読み込んだり、あるいは読み込みすぎたりしないほうがよい、ということであろう。利他的行為をしていれば天使のような清らかな存在であるというわけではないし、最先端の病院を抜けだしたからといって「命なんて惜しくはない」と思っているわけではない。初恋の人からデート後差し出された3万円を受け取らなかったとしても、その人がお金に興味がないなんてことはない。そうした在り方を「矛盾している」「不合理だ」とみなすだけでは彼らをきちんと理解していることにはならないように、単に「いい人だ」「お金には流されない人だ」などとラベルを貼り付けることもきちんとした理解とはいえない。人間をきちんと理解するということは、その多面性をきちんと理解することであり、本書で取り上げてきた「合理性」と「不合理性」とにかかわる議論はそうした試みともいえるものである。そしてこれは自分自身についてもいえる。自身の「合理性」「不合理性」にきちんと目を凝らしてみると、これまで気づかなかった自分に出会い、そのような「自分」が「他人」とどのように接し、どのように生きてきたかに気づくことができるであろう。そして、そうした反省のもと、そこから新たな自分の歴史を作っていくことができればそれに越したことはない。」



■松岡正剛&イシス編集学校『インタースコア／共読する方法の学校』（春秋社 2015.12）

「心は一秒たりとも寝ていない。エマニュエル・レヴィナスは「意識こそが存在だ」と書いた。富永太郎は「夢の中で失格するということがおこる」と書いた。体もどんな細部も止まっていない。三木成夫は「われわれは胎児のころから目覚めている」と言い、ワツラフ・ニジンスキーは「立っているだけで世界との格闘がおこっている」と言った。

編集もじっとしていない。動かない編集は編集ではないし、じっとしているエディターにはエディターシップはない。編集は変化なのである。編集はつねに変化しつづける「そこ」にさしかかって仕事をする。

イシス編集学校の諷い文句にく「わかる」は「かわる」、「かわる」は「わかる」。どうぞイシス編集学校へ！>がある。ぼくが言うのも何だけれど、大好きなキャッチフレーズだ。これは「かわることがわかること、わかることはかわること」という意味だ。もっとも「かわる」と言っても「変わる・替わる・代わる・換わる」などがあって、たんなるチェンジなのではない。そこには自分と世界の関わり方の変化が動く。「わかる」のほうも「解る・分る・判る」などがあって、理解と区別と判断は異なっていく。

こうした「かわる」と「わかる」は、必ずや「そこ」においてこそ成立するもので、「そこ」にさしかからないでは何もおこらない。」

かわる
わかる
るるる

変化のなかで変化をとらえ
変化とともに変化を生きて

時の魔術よ
見果てぬ夢よ

変わらぬものを求めながら
変わらぬことこそ変わらぬと嘯き

心の鏡に
わが変わり身を映し

流れゆくものは絶えずして
心は変わり世も変わりゆき

我は夢のなかで
夢を見るものなり



■ハンス＝ヴェルナー・シュレーダー『イースターの秘密』（涼風書林 2009.4）

「ドイツ語で「カールヴォッヘ」といわれている、この受難週間には祭壇が黒色になります。それはどういうことかといいますと、キリストは人間の持っている光や愛といった、ポジティブな面だけに結びつこうとしているのではなく、特にこの一週間、聖受難週間の間、人間の中にある深い闇の部分、暗い部分、それから悪の部分、そういったネガティブな力にも深い関わりを持つようとしているのです。キリストはあらゆるものに結びつこうとしているのです。その闇と結びついているキリストの姿を私たちは祭壇の黒で表しているのです。

この聖受難週間に、私たちの持っている、あるいは人類の持っている闇や悪と結びつき救済しようとしているキリストと共に、私たちは歩みを進めるのです。そして聖金曜日に死を体験して、そして聖土曜日に今度はキリストが地球の闇の深い部分に下りていくわけです。そこまで私たちはキリストと歩みを共にし、それから復活祭を迎えるわけです。

そして復活祭の日曜日に、キリストが地球の闇の、深みの中から現れて来ます。キリストが闇よりも悪よりも強い存在だということの現れを、私たちは復活祭に体験するのです。復活祭というのはキリスト教におけるもっとも偉大な祝祭です。ですから復活祭を祝うときに意識しなければならないのは、私たちは自然の霊たちと共にこの祝祭を祝うということです。それが大きな意味を持ってきます。」

みずからの闇を見据えよ
闇の深みより
花のように
光が咲き初める
闇のなかでこそ
光は大なる灯りとなる
闇より現れる光とともに歩め

地球よ
われら人類を抱く地球よ
自然霊たちを抱く地球よ
死と復活の秘儀を
ともに祝え
死を超えた愛こそ
未来への力となる



上なるものは 下なるものに
下なるものは 上なるものに

身体とともに 霊性の深みへ
霊性とともに 身体の深みへ

聖なるものは 俗なるものに
俗なるものは 聖なるものに

光あるものは 闇深きものに
闇深きものは 光あるものに

生あるものは 死せるものに
死せるものは 生あるものに

刹那のときは 永遠のときに
永遠のときは 刹那のときに

■谷寿美『ソロヴィヨフ／生の変容を求めて』（慶應義塾大学出版会 2015.10）

「物質、身体を切り捨てたところに聖性が成り立つのではなく、物質、身体の変容霊化の果てにこそ見えざる聖が現成してくることを信じたのがロシアの宗教的感性であった。

そのような感性に育まれてこそ、ソロヴィヨフのような宗教哲学者も生まれたのであろう。神人性という神と人の共なるわざを単にイエス・キリストという個人の内にのみ信じて終わるのではなく、既に与件として示された神人性を今度は自らこの地上に普く具体化することの必要性と必然性を彼は毫も疑うことがなかった。永遠の相の下ではソフィアとして、全地に普く及ぶ教会として、あるいは理想的人類として、既に完成されているはずのその全一的神的調和が物質的地上にも確かに具体化されることを信じ、時間性においては端緒についたばかりのそのプロセスを、人の側を能動者として成るべき世界の変容に向けて推し進めるべきことを願ってやまなかった。」



見ることは
見ることを超えなければ
ほんとうに見ることはできない

ほんとうに林檎を見るとき
林檎は目の前にあるのではない
林檎は感覚されているのだ

ほんとうに花を見るとき
花は目の前で揺れているのではない
私が花のなかで揺れているのだ

ほんとうに山を見るとき
山は目の前に聳えているのではない
山は私として感覚されているのだ

見るということは
見られるものをつかむということ
ほんとうに見るといことは
見られるもののなかで
感覚するということなのだ

■ジル・ドゥルーズ『フランシス・ベーコン 感覚の論理学』（河出書房新社 2016.2）

「具象（つまり説明的にして説話的なもの）を乗り越えるためには二つの方法がある。ひとつは抽象的形態に向かうこと、もうひとつは〈図像〉に向かうことである。この図像への方向にセザンヌが与えた簡潔な名称は「感覚」であった。図像とは、感覚に結合された感覚可能な形態である。図層は神経系統にじかに作用するが、神経系統とは肉体に属するのである。一方抽象的〈形態〉は脳に向かい、脳の媒介によって作用するのであって、より骨に近いのである。（・・・）感覚を与え受け取るのは同じ身体であり、身体は同時に主体であり客体なのだ。私という観客は、絵の中に入り、感じるものと感じられるものがひとつになった状態に接近するときには、感覚を経験することがない。印象主義者を超えたセザンヌの教訓とは、〈感覚〉は、光と色の「自由な」あるいは肉体を超脱した戯れ（もろもろの印象）の中にあるのではないということである。反対に〈感覚〉とは、それがリンゴの身体であっても、身体の中にあるということだ。色彩は身体の中にあり、感覚は身体の中であって、大気中にあるのではない。感覚は描かれるものである。絵の中に描かれるものとは身体であるが、この身体は対象として表象されるのではない。そうではなく、しかじかの感覚を感じるものとして生きられる身体なのである（・・・）。

ベーコンとセザンヌを結ぶ糸は、実に普遍的なものである。感覚を描くことなのである。あるいはベーコンがセザンヌによく似た言葉で言っているように、事実を記録すること、である。「どうして絵画がじかに神経系に衝撃を与えるのか理解することは、切迫した難しい問題である」。二人の画家の間には明確な違いがあるだけだ、というものもあるだろう。セザンヌの世界は風景と静物であり、それ以降は肖像画さえも風景のように描かれている。ベーコンの場合、序列は逆で、静物や風景はあまり重要でない。セザンヌの〈自然〉としての世界とベーコンの人工としての世界。しかしまさにこのあまりに明白な違いは、「感覚」や「気質」によって説明されるものではないか。つまりベーコンとセザンヌを結びつける何か、二人の共通点によるものではないか。ベーコンが感覚について語る時、彼はセザンヌに大変近く、二つのことを言いたいのである。否定的な意味で、彼は感覚に結合された形態（図像）は、形態が表象するとみなされる対象に結合された形態（具象）の反対物だという。ヴァレリーの言葉によれば、感覚は、じかに伝達されるもので、語るべき物語による迂回や退屈を避けるのである。そしてベーコンは、肯定的な意味で、感覚とはひとつの「秩序」から別の「秩序」へ、ひとつの「水準」から別の「水準」へ、ひとつの「領域」から別の「領域」へ移行するものだと、言い続ける。だからこそ感覚は歪形をつかさどるもの、身体の歪形の動因なのである。この点で、私たちは具象画にも抽象画にも、同じ非難を向けることができる。具象画も抽象画も脳を経由するので、神経計に直接作用することがなく、感覚に到達することがなく、図像を出現させることもないのだ。それは両方とも、唯一の同じ水準にとどまっているからである。両方とも形を変化させることはできるとしても、身体の歪形には至らない。」



■ダニエル・ジョセフ『クジラと泳ぐ／ダスカロスと真理の探究者、その教えと実践』（太陽出版 2016.3）

「人間が人生の中でいちばん最初にすることは人格を形成することだ。人格の自己認識は、時間、空間、場所に役を割り当てられた真の「魂の自己・認識」の影であり、それ以上のものではない。この人格はどのように形成されるのだろうか。（・・・）人間の真の本質は永遠の「スピリット（霊）・魂」だ。時間、空間、場所という「一次的存在の世界」に存在するためには、私たちは健全な人格を育てなくてはならない。」

「最初に私たちは、自分の人格について学ぶ必要がある。それはもちろん肉体以上のものだ。まず自分の人格の分析を始めるのは、その構成を理解するためだ。私たちは肉体が人格・自己の一部であること、そして、人格・自己の形が肉体の上にあることを理解する。私たちの人格の自己認識は私たちのすべてのエレメンタルの集合体、つまり、すべての思い、感情、欲望の総合体なのだ。」

「私たちの人格は私たちの「真の」自己でもあり、「真の」自己でもない。人格の中核には、私たちの「真の自己」、つまり「スピリット・魂・自己」の光線があるが、その他の構成部分は「真の自己」ではない。人格とその肉体が生きているのは、その中に「聖なる霊」と「真の自己」から来る「命の脈」（パルス・オブ・ライフ）があるからなのだ。しかし、それぞれの人格には独自の生き方があり、他者とは異なる。命自身は共通だが、それぞれの生き方は異なる。それは私たちの人格を構成するエレメンタルのセットが他者のものとは異なるからだ。自分を構成する独自のエレメンタルのセットは私たちの「真の自己」とも違う。」
「人間としての私たちの仕事は今の人格を知ることだ。それは私たちの人格を形成している想念、感情、欲望を研究するということで、レンガを一つずつ積み上げて家を建てるように、私たちの人格はエレメンタルを一つずつ積み上げてつくられる。」

私という人格はみずからつくる
ひとつひとつの思いからつくられる

私という人格は思いでできた建物
そこに住んでいるのが私だ

建物は私であり私ではない
地上を生きるための住み処である

私は住み処をつくりそこに住み
それを私そのものであると思いこんでしまう

私の顔を見て私であると思うように
けれどもその鏡の奥に私はいるのだ

鏡の奥の私は私を悲しい目で見
ほんとうの顔を見ているのかと

私は思う
ゆえに私という人格は生まれる

私という人格は
私であって私ではないのだ